

# 民俗社会によって管理されてきた仏像の予備的考察

——仏像伝説の形態を中心にして——

橋 弘 文

## 1 はじめに

旅行作家の北尾籙之助は、昭和14年から15年(1929から1930)にかけて若狭地方を旅行した。北尾は、明和4年(1767)に板屋一助が著した『稚狭考』を若狭旅行のガイドブックにしていた。北尾が興味深く読んだ『稚狭考』の一節に矢代の手杵祭の記述があった。かくして、北尾は、おそらくは昭和15年(1930)の初夏に、若狭湾に面する矢代を訪れた。北尾は矢代に到着するとすぐに、手杵祭の起源と関係があると伝えられている観音堂を訪れている<sup>1)</sup>。北尾は観音堂の縁に腰をかけて、薄暗い内陣の中を覗き込むなどして、観音堂のようすを素描している。北尾が覗き込んだ薄暗い内陣の奥には、十七年に一度開帳される観音像を安置する閉じた扉があった。

現在でも矢代の人びとは、この観音堂を「おかんのんさん」と親しみをこめてよぶ。観音堂には木造の聖観音菩薩像が安置されている。矢代の聖観音菩薩像は、『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』(1989年)によれば、檜材の一木造りの座像で、像の高さは94.7cm、平安時代後期の作とされている<sup>2)</sup>。この矢代の観音像は、昭和42年(1967)2月3日に、県指定文化財に指定された。『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』は、矢代の観音像の安置場所である観音堂を福寿寺と記している。矢代の人びとは、観音像を安置するために福寿寺を建立したと伝承されている。矢代に伝わる観音堂縁起文書は、福寿寺に僧侶が常住していた時代があったと語るが、その真偽は定かでない。いずれにせよ、福寿寺、すなわち矢代の観音堂は矢代に人びとによって建立され、管理されてきたといえる。

矢代の現在の家数は18軒。過去、最大でも40軒を

こえることはなかったと伝えられている。家数20軒ほどの集落が共同で平安時代に作られた仏像を管理してきたという事実は驚くべきことではないだろうか。さらに若狭地方には、矢代のほかにも中世に作られた仏像を地域共同体で祭祀し管理してきたという集落がいくつもみられる。

1965年に出版された著書で梅原猛氏は、ヨーロッパ的な知的教養で仏像を見る、いわばロマン的に仏像を鑑賞するしかたや、美術史学に代表される仏像を様式論的にとらえるしかたをのりこえて、精神史的な立場で仏像をとらえることの重要性を指摘した<sup>3)</sup>。梅原氏は、日本人がそれぞれの仏像をどのように崇拜してきたかを理解することを通じて、仏像の背後にひそむ思想を究明しようとしている。この梅原氏の考えは、民俗社会の人びとと仏像とのかかわりを考えるうえでも重要であると思われる。民俗社会の人びとがどのように仏像とかかわってきたかということ进行分析するによって、民俗社会の人びとの精神史が明らかにされると予想される。

むしゃこうじ・みのる氏は、美術史の立場から、民俗社会における仏像について、先駆的な研究をおこなっている<sup>4)</sup>。むしゃこうじ氏によれば、10世紀から12世紀ころにかけて、地方における仏像の製作とそれを安置する仏堂や寺の建立がさかんになるという。しかも、そうした仏像の祭祀は、「当時において共同の生活圏としては最小の単位といえるような地域ですら」<sup>5)</sup>おこなわれていた。

これまで、民俗社会の人びとと仏像とのかかわりについては、民俗社会の人びとは、有名な寺院の仏像を熱心に崇拜したり、あるいは仏像の霊験にふれたりするなど、どちらかといえば受動的な信仰者としての側面に焦点が当てられる傾向があったと思われる。ところが、じっさいには民俗社会の人びとは、自分たちで仏像を発見

して祭祀したり、あるいは自分たちで仏像の製作を依頼し祭祀したりするなど、仏像の管理者という積極的な側面ももっている。

奈良や京都の寺院で祭祀されている仏像は、それらの仏像の製作や祭祀の過程を知ることができる文献資料にめぐまれている。これに対して民俗社会における仏像の多くは、そうした文献資料を欠いていることが多い。しかし、そのかわりに民俗社会には仏像をめぐる豊かな伝説が伝承されている。民俗社会における仏像をめぐる伝説は、仏像の製作と祭祀の歴史的な事実をそのまま語っているとはいえないが、仏像をめぐる伝説から民俗社会の人びとと仏像とのかかわり方を読み解くことは可能であると考えられる。

本稿では、民俗社会が管理してきた仏像の伝説について考えるための基礎作業として、仏像伝説の形態を明らかにしたい。個々の民俗社会の仏像伝説は、けっして特異なものではなく、仏像伝説の形態の特色を共有していることが予測されるからである。

## 2 仏像伝説の形態

仏教の創始者である釈尊が生きていた時代（紀元前463～紀元前383年）には、仏像は製作されなかった。仏像は、釈尊入滅後、数世紀を経た紀元1世紀以降に、ガンダーラもしくは中インドのマトゥラーで製作されはじめたといわれている<sup>6)</sup>。そして仏像にたいする礼拝が、仏教の儀礼の一つに加えられ、5世紀ころにインドにおいて仏像形式が整っていったと考えられている<sup>7)</sup>。

よく知られているように、仏像は、仏教の伝播にとともに、インドから中国、中国から朝鮮半島を経て、6世紀に日本にもたらされたが、日本に伝来した仏像は、中国で製作された様式の影響をうけているといわれている<sup>8)</sup>。

仏教という外来の宗教施設として寺院が建立されるようになるのにもない、寺院建立の縁起が作りだされる。それらの寺院建立の縁起において、寺院の本尊である仏像にかかわる記述が縁起の中心となる。多くの場合、寺院建立の縁起にみられる仏像は伝説的に記述される。逆にいえば、仏像を製作した仏師はだれか、仏師はどのような材料でどのようにして仏像を製作したか、そしてそれにはどれだけの費用がかかったか、などという仏像製作から安置にかかわる事実関係について、寺院建立の縁起は十分にはのべていない。寺院建立の縁起にみ

られる仏像の記述は、どうして、特定の場所に寺院が建立されなければならなかったか、どうして、特定の場所に仏像が祭祀されなければならなかったか、そして、祭祀された仏像がどのような霊験をあらわしたかという宗教的な真実についてのべる。いいかえれば、寺院建立の縁起は、それぞれの仏像を信仰する人びとにとっては、「ほんとうにあったこと」を語っているといえよう。

仏像伝説の特色は、現実の仏像祭祀のプロセスと対照させるとき、うきぼりにされてくると考えられる。現実の仏像祭祀のプロセスでは、依頼者が仏師に製作を依頼し、製作された仏像にたいして、代価を支払った後、依頼者が予定していた場所に、その仏像を安置して祭祀する。これにたいして、後述のように仏像伝説では、仏像もしくは仏像の材料は発見されることが多く、製作される場合には、いくつかの奇跡をともしない、祭祀の過程において、祭祀場所の選定や安置される建物の建設にまつわる異常な出来事が語られ、祭祀後、多くの霊験が伝えられる。

仏像伝説は、仏像もしくは仏像の材料の発見、あるいは仏像の製作から祭祀にいたるまでのプロセスと、祭祀後の仏像の霊験の二段階に分けて考察することができる。そこで仏像伝説群は、1. 仏像の祭祀にいたるまでのプロセスの部分語る伝説、2. 仏像祭祀後の霊験伝説だけを語る伝説、3. 仏像の祭祀にいたるまでのプロセスと祭祀後の霊験伝説の両方を語る伝説、から構成されているといえる。

仏像の霊験説話という場合、人が仏像に祈願した結果、その祈願の内容が実現される話や、仏像が夢などに現れて人に指示をするという話などが想定されるが、本稿では、そうした仏像の霊験説話のなかでも、仏像そのものに何らかの物理的な変化が生じたと言われる話に限定する。そのほうが、人と仏像とのかかわりのしかたが、より明らかになると考えられるからである。

## 3 『観音冥応集』の仏像伝説

理想的には、できるだけ多くの寺院縁起や仏教説話集をもとにして、仏像伝説を精査すべきだが、本稿では、神戸説話研究会が翻刻し、解説している『宝永版本 観音冥応集』<sup>9)</sup>に収められている仏像伝説を基準にして、仏像伝説の概観を試みたい。

宝永3年(1706)に刊行された『観音冥応集』には、全6巻、192の説話が収められている。そのうち、およそ53個を仏像伝説として読むことができる。『観

音冥応集』の著者の蓮体(1663年~1726年)は、古代や中世の寺院縁起や仏教説話集などから引用した説話とともに、蓮体とほぼ同時代に語られていた伝説も提示している。そのなかには、蓮体じしんが聞き書きをおこなっているものもみられる。

仏像伝説では、仏師に依頼して製作された仏像ではなく、発見される仏像が語られる。仏像は、偶然に発見される場合もあるし、夢の知らせによって発見される場合もある。偶然に発見される仏像は、人びとに発見されるに際して、多くの場合、光を放つ。たとえば、『観音冥応集』巻1の第9話には、河内の国古市郡通法寺の千手観音像をめぐるつぎのような伝説がのべられている。

長久4年(1043年)9月の上旬に、源頼義が河内で軍事練習のために狩猟をおこなう。頼義が峯に上り、四方を見ていたとき、にわかに山中が輝き渡った。不思議な香りが四方にただよう。草木はさながら金色の光をなす。頼義が光の根源をたずねてゆき、光輝く千手観音菩薩像を発見する。頼義はこの像を安置するために館の南に寺を建て、通法寺となづける。元禄13年(1700年)に再建される<sup>10)</sup>。

この話では、山中で金色の光にくわえて不思議な香りを放つ千手観音菩薩像が発見されているが、仏像は海中で発見されるときにも、やはり光を放つ。『観音冥応集』巻4の第21話は、備後鞆浦の福禅寺の千手観音像についてつぎのようにのべている。

延喜帝(901~23年在位)が、千手観音像が光を放ち海中に立つ夢を見る。勅使を難波の浦に使わせる。海中に光明あり。浜辺に近づく。1寸8分の千手観音像だった。宮中で供養し、守護とする。天曆帝(947~57年在位)のとき、福禅寺を建立する。この像を、恵心僧都に作らせた本尊の頭の中に納めた。また、根堂の下に埋めたという説もある。

この伝説では仏像が放つ光とともに、夢が仏像発見の重要な契機になっている。『観音冥応集』巻2の第2話には、河内の国錦部郡鬼住村の延命寺の如意輪観音像が、夢にあらわれた人のことばにしたがって、獲得された話をのせており、また、『観音冥応集』巻6の48話は、京都の室町に住む雲外可月居士が、夢に現れた童子から観音像を授けられるという話を伝えている。

仏像のなかには、いったん祭祀された後、何らかの理

由で行方不明になるものがあるが、それらの行方不明の仏像が再発見されるときにも、やはり光を放って、人びとの注意をうながしたということが、『観音冥応集』巻5の37話などに語られている。

光を発して発見される仏像の話や、夢の知らせによって発見される仏像の話にくらべると数は少ないが、仏像が人間の声を出して発見されるという話もある(『観音冥応集』巻5の第2話など)。

仏像伝説のなかには、仏像の材料が、光、におい、声、そして夢の知らせによって発見されるという話がみられる。吉野の比蘇寺の観音像伝説は、つぎのようにのべられている(『観音冥応集』巻1の第7話)。

推古天皇3年(595年)の春、南海の海上を漂う一つの木があった。この木は夜な夜な光りを放ち、雷のような音を發した。この木は流れて4月に淡路島の南の浜に漂着した。この木は、太さ一囲い、長さは8尺(約250cm)。島人がこの木の一部を切り取り薪にすると、その煙と薫りが天子まで達した。聖徳太子は、「この木は、沈水香木で、この香木は、南天竺の南海の崖にあるものです。この木の実は、鶏舌香、その花は丁子、その脂は薰陸、といいます。水に流れて沈んで久しいものを沈水香、久しくないものを浅香といいます。今、陛下が仏法を信じ、仏像を作るので、天龍がそれを感じ悦び、この木を漂着させたのです。」と、天皇に言った。

そこで天皇は、百済の仏工に命じて、観音像を彫刻させて、吉野の比蘇寺に安置した。この像は時々光明を放った。この像が、日本の観音像のはじめである。

また、『観音冥応集』巻6の第1話には、讃岐の志度寺の観音像の材料となった木材は、もともとは近江国高嶋郡の百蓮華谷によこたわり、瑞光を放ち、妙香を發していた楠木に似た木が、大津に漂着し、さらに、淀に流れ寄り、そして海に流れ出て、最後に讃岐の志度浦に流れ寄ったと語られる。

仏像の材料も海上だけでなく山中でも発見される。『観音冥応集』巻3の第23話には、淳和天皇の妃である如意尼が如意輪観音像の材料をさがしていたとき、摂津の山中で光を放っている桜の大木を発見した話がのべられている。

『観音冥応集』巻5の第14話は、六斎日に千手陀羅尼を唱える、樹齡数千年の槻の木が、京都の行願寺(草堂)の千手観音像の材料となった話を伝えている。

仏像伝説には、仏像の製作者の名前が語られている伝説もみられる。安鎮行者（『観音冥応集』巻5の第22話）、行基菩薩（『観音冥応集』巻5の第37話）、法道仙人（『観音冥応集』巻6の第51話）、仁弘法師（『観音冥応集』巻5の第15話）、行円上人（革上人）（『観音冥応集』巻5の第14話）、円珍（『観音冥応集』巻5の第11話）、弘法大師（『観音冥応集』巻4の第27話、巻3の第23話、巻2の第26話）など、著名な僧が仏像の製作者となっている。『観音冥応集』には、仏師の名前がされている伝説が二つある（『観音冥応集』巻5の第16話）。一つは、『元亨釈書』や『宝物集』を典拠とする伝説で、感世という京都の仏師が登場する。もう一つの伝説は、蓮体と同時代に語られていた伝説で、京都の御室の仏師、法橋北川運長が登場する。どちらの仏師も、仏教を深く崇敬するすぐれた仏師として語られている。また、具体的な名前は伝わっていないが、「百済の仏工」が仏像を製作したという伝説もみられる（『観音冥応集』巻1の第7話、巻4の第2話）。

興味深いことに、仏像伝説には、神仏の化身と思われるような童子や老翁が仏像の製作者として、しばしば語られる（『観音冥応集』巻6の第1話、巻6の第14話、巻5の第17話、巻2の第13話）。さらに神が仏像を製作したという、つぎのような伝説もみられる（『観音冥応集』巻5の第12話）。

弘法大師が東寺に住んでいたとき、東の峰から光明が輝き、東寺を照らしているのを発見する。大師が光をたどって東山へ行くと、白衣の翁が現れ、ここに天照大神が製作した1寸8分の十一面観音像があり、それを祭祀する仏宇を作れ、自分は熊野権現だ、と言って消える。

弘法大師が1尺5寸の十一面観音像をあらたに作り、1寸8分の十一面観音像をその胸中に納める。

仏像伝説のなかには、製作者が不明というよりもむしろ、仏像が奇跡のようなしかたで出現するという話もみられる。『観音冥応集』巻4の第31話では、観音像を作るためにためられていた銭箱が火事で焼けたとき、銭でできた観音像が灰の中から出現している。また、『観音冥応集』巻4の第33話には、火災で焼失した寺（下総国の檀林寺）の灰の中にユウガオが生じ、そのユウガオの中から、かつて寺で安置していたのと同じ観音像が出現したという伝説が語られている。

つぎに仏像伝説の特色として、仏像が安置される場所

が超自然的なしかたで指示されるという伝承がみられる。『観音冥応集』巻3の第5話には、つぎのような話が記されている。

一演僧正が、観音像をたずさえて、その像を安置する場所をさがし歩く。貞観年中（859～77年）に、一演僧正が京都の鴨川の西岸に来たとき、地が震動し、紫雲が降り垂れ、蓮華の花が降り、不思議な薫りがただよった。一演僧正は、そこに寺を建て、感応寺となづけ、観音像を安置した。

また、『観音冥応集』巻3の第22話には、京都の六角堂に如意輪観音像が祭祀されるようになったいきさつを語る、つぎのような伝説が記されている。

淡路の浜に筐が流れ着く。聖徳太子が1尺2寸の如意輪観音像を筐の中に発見する。聖徳太子はつねにその像を携える。聖徳太子が、四天王寺建設のために材木をもとめて京都にきたとき、ある泉で水浴する。そのとき如意輪観音像を近くの木の枝のあいだに置く。聖徳太子が、水浴後に、如意輪観音像をとりあげようとしたら、重くて持ち上げられない。その夜の聖徳太子の夢に如意輪観音像が現れ、その地に寺を建て、安置するように言う。

仏像の材料となる木材が、仏像が安置される場所を超自然的なしかたで指示するという伝説もみられる（『観音冥応集』巻5の第17話）。

仏像は安置された後、霊験を示す。仏像じたいの形に注目する場合、仏像伝説の霊験は、おもに二つの方向にむかっていると考えられる。一つは、仏像が、人間の行動や力を超えるような行動や表現をするという方向であり、もう一つは、人間によって作られた物体である仏像が、人間のような行動や表現をとるという方向である。

前者の超人間的な仏像の霊験伝説は、仏像＝仏という思考を表している。ま仏像は不思議な光を放ち、ときには人間に変身する。

後者の仏像の人間的な霊験伝説では、仏像は人間と同じように声を出したり、汗をかいたり、そして血を流す。この二つの側面をかねそなえている伝説も多くみられる。

仏像は、現実には人間によって作られた物質であるが、霊験伝説では、仏像がそのまま、たとえば観音菩薩のような霊的な存在と等しく認識される。しかし同時に

霊的な存在として認識される仏像は人間にメッセージを伝えるために、仏像じしんが人間の身体的な特色を表す。

安置され祭祀された仏像のなかには、ふだんは人びとの目に触れることができず、特別なときにだけ開帳されて、見るができるという仏像がある(『観音冥応集』巻4の第24話、巻5の第21話)。巻5の第21話には、開帳のいわれが伝説として語られている。

法道仙人が、摩耶山の十一面観音像を製作する。天平勝宝5年(733年)5月に雷火のとき、この十一面観音像は自ら飛び去って、堂の乾の方角にある松の木にかかり焼失をまぬがれた。また、延暦21年(802年)2月の火災のときには、3人の化人が現れて、この像を抱いて麓の山寺に安置したので、焼失をまぬがれた。

慶長元年(1596年)7月27日、強風のためにこの像が安置されていた堂が傾く。高野山心王院の俊圭阿闍梨が涙を流して冥助を祈ると、この像が光明を十方に照らしている夢を見て、開帳することにする。慶長元年(1596年)11月12日から17日間、開帳する。それによって資金があつまり、堂の修復がおこなわれた。

法道仙人が製作した十一面観音像の胸の中に、釈迦如来が42才のときに製作した3寸の十一面観音像が納められていると伝えられている。この釈迦如来製作の仏像は、摩耶夫人、阿那律、毛頭毛音、道宣律師、そして法道仙人に伝えられた。

このように『観音冥応集』の仏像伝説を概観することによって、仏像伝説が仏像やその材料の発見、製作および製作者、安置の場所の指定、霊験、開帳における異常な出来事の生起から構成されていることを確認できる。そして、仏像やその材料の発見、製作および製作者、安置の場所の指定という要素は、共同体は外部の力を得ることによってはじめて仏像を安置することができるというテーマを示している。また、仏像の霊験、開帳伝説は、仏像の霊的な力が仏像を管理する共同体の範囲をこえて発揮されることも表している。いいかえれば、仏像の外部性が伝説として語られているのである。

#### 4 矢代の観音像伝説

矢代の観音像の祭祀、観音堂の建立、そして観音像の霊験をめぐる、いくつかの伝説が伝承されている。それらの伝説は、文字伝承と口頭伝承の両方をふくんでいる。

矢代に伝わる六本の「観音堂縁起文書」には、矢代の観音像の伝説が語られている。ここでは、寛政6年(1794)に書写されたと思われる「観音堂縁起文書」<sup>11)</sup>をもとにして、矢代の観音像伝説をみてゆこう。

「観音堂縁起文書」によれば、矢代の観音像の製作者は明らかではないが、その観音像は天竺(インド)で作られたと暗示されている。そしてインドの仏教僧の善無畏が、唐の開元4年(716年)に、その観音像をもって、天竺から唐へ行った。唐の玄宗皇帝は、たいへんその観音像に帰依した。後にその観音像を船に乗せた唐の人びとが、天平宝字丁酉(757年)の2月に矢代の海岸に漂着する。矢代の人びとは、漂着船に乗っていた人びとを3月3日に殺害した。矢代の人びとはその船の中に光輝く観音像を見出して、それを安置する庵を建てた。その後、矢代では、「不祥厄穢」などが連綿と続く。矢代の人びとは、これは殺された人びとが関連しているのではと思い、大同元年(806年)の春に、漂着船の材木で寺を建立して観音像を祭祀し、殺された人びとを弁才天とあがめ、そして、毎年3月3日に懺悔の思いをこめて祭りをすることにした。そうすると、災厄は消滅した。

矢代の人びとは、「罪を悔い、長く観音像に帰依するならば、この浦を守るだろう」という(観音像の)夢を見る。

「観音堂縁起文書」は、矢代の女性が出産で苦しまないのは、観音像の霊験だとのべる。矢代の観音像の霊験の話は天皇にまできこえ、観音像が祭祀されている寺は勅願所になる。乱世で寺は烏有に帰すが、観音像が安置されている堂と観音像は無事。これも観音像の威徳であると「観音堂縁起文書」はのべている。

はじめに、矢代の観音像が新たに建立された寺に安置されるまでのプロセスをみてゆこう。矢代の観音像は漂着船に祀られていたが、その観音像をのせた船が矢代の海岸に流れ着いたいきさつを伝える伝承もみられる。ある伝承は、漂着船は矢代と阿納の境に流れ寄り、両村の人びとが自分たちの方に来るように招くと、その船は矢代の浜に流れ着いたと伝えている<sup>12)</sup>。また、ある伝承

によれば、その漂着船は矢代の海岸にあった胞衣捨て場に漂着したと語られている<sup>13)</sup>。

寛政6年(1794)版「観音堂縁起文書」は、漂着船で観音像を祭祀していた人びとについて、「やんごとなき女性六人、ふな子とみへしもの二人」とのべ、かれらは「音韻」の通じない人びとであったと語る。また、明治12年(1879)に矢代で書かれた文書は、その漂着船に乗っていたのは、唐の玄宗皇帝の妃の楊貴妃だったと言いつづけているとのべている<sup>14)</sup>。さらに、ある伝承によれば、船中の女性は許されない妊娠のために流されたと言われている<sup>15)</sup>。

漂着船で発見された観音像は、「かくかく(赫々)」としていた、すなわち光輝いていたと語られる。この観音像は、いったん「柴の庵」に安置されるが、矢代に「不祥厄穢」の事態が続く。板屋一助の『稚狭考』は「疫を煩らひくるしみ」とのべている<sup>16)</sup>。およそ50年後に新しい堂が漂着船の材木で建立され、観音像がそこに祭祀され、ようやく矢代の災厄はおさまる。

仏像の外部性という観点から、矢代の異人殺し伝説は、矢代に仏像を安置するためのプロセスの一部と解釈できる。いいかえれば、矢代の人びとは、仏像を外部から得て、安置するために異人殺しをおこなわなければならなかったのである。

つぎに観音像が祭祀された後、人びとと観音像がどのようにかかわってきたかについてみてゆこう。観音像は矢代の人びとの夢に現れ、観音像に帰依するならば矢代の浦を守ると言う。寛政6年(1794)本「観音堂縁起文書」は、観音像に祈願する女性は安産になり、矢代では産婦の難がないことは、観音像の示現であるとのべている。矢代の観音像が安産をもたらすという信仰は、つぎのような伝承にもみられる。

江州のある女性が難産で困っていた。その女性が矢代の観音の開帳儀礼で使われる絹糸を水にうかべて飲んだ。すると彼女は苦しむことなく出産した。不思議なことに生まれてきた子どもの指に、女性が出産前に飲んだ絹糸が巻きついていて、それから矢代の観音の霊験話が江州にひろまり、江州から大勢の人びとが手杵祭に参詣するようになった。矢代に至る坂道が、アリの行列のような多くの参詣者で混雑した<sup>17)</sup>。

矢代の観音像は、開帳儀礼のときにだけ見ることができ、その像に変化が生じたという、つぎのような伝承がみられる。

矢代の観音像の眉間に黄金がついており、その眉間の黄金はまばゆいばかりの光を放っていた。昭和の前半まで、矢代の人びとは、観音像の開帳儀礼のときに、そのままではまぶしすぎて観音像を拝むことができないので、観音堂内に煙をくすべらせることによって、観音像から発せられる強烈な光を和らげていたという。しかし、戦後、観音像の眉間にあった黄金が、コルクにすりかわっていた<sup>18)</sup>。

眉間の黄金とは、仏像の白毫のことだと思われるが、『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』(1989年)は、「白毫は後補のもので木製嵌入」と判断している<sup>19)</sup>。

観音像の眉間に黄金がついており、そこからまばゆいばかりの光を放っていたことが事実かどうかを実証することはできない。むしろ重要なのは、観音像に生じた変化が伝説として語られてきたことの意味にあると思われる。

矢代の観音像に生じたという変化は、いったい何を伝えようとしているのか。おそらく観音像をめぐる展開される矢代の生活の複合的な変化を表していると思われる。したがって、こうした仏像伝説を考察することは、生活と仏教の接点を考察するだけでなく、生活の変化の考察にもつながると思われる。

#### 注

- 1) 北尾録之助『若狭紀行』創元社 1930年。
- 2) 『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』1989年。
- 3) 望月信成・佐和隆研・梅原 猛『仏像 心とかたち』(NHK ブックス)日本放送出版協会 1965年。
- 4) むしゃこうじ・みのる『地方仏Ⅰ』法政大学出版社 1980年、むしゃこうじ・みのる『地方仏Ⅱ』法政大学出版社 1997年。
- 5) むしゃこうじ・みのる『地方仏Ⅰ』法政大学出版社 1980年。
- 6) 三枝充恵『仏教入門』(岩波新書)岩波書店 1990年。
- 7) 高田 修『仏教の説話と美術』(講談社学術文庫)講談社 2004年。
- 8) 高田 修、前掲書。
- 9) 神戸説話研究会編『宝永版本 観音冥応集——本文と説話目録——』和泉書院 2006年。
- 10) 『観音冥応集』の仏像伝説の要約文は、筆者による。
- 11) 寛政6年本の「観音堂縁起文書」は以下のとおり。福井県文書館で閲覧した。文意ができるだけ通じるように、段落をもうけ、句読点をつけくわえ、平仮名を適

宜漢字に改めた。また、意味不明な箇所は□で表し、一部ほかのテキストをもとに補ったところもある。

若州矢代浦福寿寺略縁起

當寺本尊聖觀世音菩薩は大唐の開元四年に當りて、天竺より善無畏三藏此靈像を負ふて唐朝に入る。時に玄宗皇帝はなほだ帰依し玉ふとなり。然ルに当然のことわりにや、幾年なく日本に住み此浦にとどまりたまふ。渡り玉ふ時の船、唐船なり。ゆへ唐作と申傳へたり。

其来由をたづぬるに、年代悠久なる上、回禄も度々ありて、古書等も多くは、□□のわざわるにかかれり。今残れる記および□ぬのおもむきを以て梗概を述べば、人皇四十六代孝謙天皇の御宇天平宝字丁酉の二月、唐船一艘、纜を此浦につなぐ。此浦を君か浦といふ、又矢代とせうする皆ゆへあるなり。其船をのぞみみるに、やんごとなき女性六人、ふな子とみへしもの二人、共に磯辺におりつつ藻などを求むるてい、いづれ日の重ね月をこへ、風波の難をしのぎけん。いと哀れなるありさまなり。

しかるにいかなる因縁にや、此浦人たちまちふにんの心を失いしがために、去るに三月三日といふに、船中の上下むなしくなる。其期にのぞんで一同□たなごろを合せ、恕を請ふていなりしかど、元より音韻とてもつうぜ□□□□□りしとなん聞く時ハ千ざいのもと、尚たもとをうるほすにたへたり。

さるほどに船に積みし処の□□□らてうき等おびたたしく、又千いつのこうごん千ぎんのしゆなどありけるよし、中につきて此聖觀自在菩薩威光かくかくとしてましませしかば、かかるなさけなき心にもおのおの、奇異の思るを生じ、柴のいおりを結び安置し奉ける。

かくて人皇五十一代平城天皇のころ迄およそ五十年の間、不祥厄穢等、連綿として絶へざりしにぞ、まさしく仏意にそむき、時にハ亡き人々のわざならんと、大同元年丙戌の春より、始メほどきし船の材木を用て此堂を建立し(則當堂の柱虹梁なけし等多く唐木なり)、又一字を造営して福寿寺となづけ、僧伽を置きて朝懺暮悔、その上人々をバ弁才天とあがめ(今矢代崎の弁天といふ是なり)、じよさいの礼奠ながく怠慢なからしめんと誓ふ。

其式毎年三月三日の祭礼是なり。尤も其様、異体にして、参詣の人、願をとくといへども、おのづから発露、懺悔のことわり、冥慮にもかないけん。災厄もすみやかに消滅し、あまつさへ戸ごとに瑞夢の感ありけるハ、汝たち犯せる罪を悔み、ながく尊像に帰依しなバ、かへつて此浦を守るべし。

実に觀世音ハ大悲深重にして三十三に身を現し、十九に法を説き、能救世間の誓いいちじるしといへども、別に此尊容の産生を守らせ玉ふ事ふしぎといふもおろかなり。若誠の心をもつて祈らん輩、産の道やすからざるあらバ、此ことわりある事なけん。なをしも将来の人、□□□□をつせうぎのため、當浦において産婦の難なからしめん。其をとつて法とすべしとの御示現なり。

されバ一旦ハ悪をこらさんために、再往を現じ、又善にすすめんためかく迄御告げ有し事むべなるかな。如来設浴の二門をまふけ、闍提の衆生を救い玉ふ事、此旨すでに天庁にたつせしかバ、勅使御下向ありて、嚴重の法會等おこなわせられ、勅願所となり、□んせもあまたありといへとも、乱世に及び寺院も廢して烏有となんぬ。しかれども本尊ハ自若としてましまし、本堂も朽ずして千有よ年の今に到る事、全靈像の御威徳なり。

是を以て彼をおもふ當来の利益もむなしからざる事をあをけバ、いよいよとふとき御尊像なれば、おのおのつつしんで拜礼あらせませ。

甲寛政六年寅三月十四日より十八日

御開帳者 辦藏

- 12) 鯖江女子師範学校編『福井の伝説』1936年。
- 13) 筆者の聞き書き調査による。
- 14) 矢代個人蔵の書写文書。
- 15) 筆者の聞き書き調査による。および、高谷重夫・橋本鉄男『朽木谷民俗誌』1959年。
- 16) 法本義弘校訂『拾稚雑話・稚狭考』福井県郷土誌懇談会 1974年。
- 17) 筆者の聞き書き調査による。
- 18) 筆者の聞き書き調査による。
- 19) 『福井県史 資料編14 建築・絵画・彫刻等』1989年。

